

雑学 鳥獣植物戯詩

全24回

八木幹夫

第6回【ミツルさんの鮎】

岩場のむこうに吊橋が見える。溪谷をまたぐように雲がゆつくりと流れる。ミツルさんは浅瀬にいる子供や吊橋を渡りかけ足をとめた大人たちから期待の視線を注がれている。もつとも高い岩場から足が離れた。紺碧の空へ向かう姿勢から音立てて一気に水中に吸い込まれる。深緑の水が割れる。しばらくの沈黙。がばつと頭が現れ、顔を左右にふって水を切る。川つ子の勇姿だ。旧津久井郡太井村荒川地区の清流はすでに湖底に沈んだ。（現在の神奈川県相模原市緑区根小屋）

昨年十一月、ミツルさんは八四歳の生涯を閉じた。中学を卒業し、洋服職人の父のもとで働いた。明るくやさしい人で、病弱の十歳違いの私を可愛がってくれた。小柄だが運動神経は抜群で、川遊びといえば、ミツルさんの空中に浮かんだ肉体が目には焼き付いている。

溪流の岩場のへこみにもぐると、しばらく出てこない。浮上する右手に二匹の鮎が魚体をくねらせる。左手にも大きなウグイ。素手の漁だ。少年には戻れないが、水の美しい時代だった。

夏空へくの字に飛び込む岩場かな

山羊